

特集

残したい、篠山のたからもの

古いものをどんどん捨て去り、軽くて薄い機能的なものを求めるようになり、暮らしは便利に、快適になりました。その反面、失われたものも少なくありません。今回の特集では、伝統建築を守ったり、古いものを今の生活でうまく活かしたり、さらには、消えゆく風景を切り絵に残したりされている皆さんにご登場いただきながら、皆さんが心に抱かれている篠山の「たからもの」をご紹介します。



河原町妻入商家群。平成16年12月、西新町、南新町、東新町、小川町、下河原町、上河原町からなる「篠山市篠山伝統的建造物群保存地区」が「国の重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。

活かす



▲玄関先に飾られた大八車の車輪の置物が民家と見事にマッチしています

古材で暮らしを美しく彩る

木田 猛さん・多恵子さんご夫妻
(住山)

白髪岳の麓にのどかな田園が広がる静かな里、住山。ここに、築百二十年余りの古い民家を購入し、四季折々に変化する自然の息吹を感じながら、ゆったりとした時間を楽しんでいる木田さんご夫妻（西宮市生瀬在住）がいっぱいいます。もともと、信州に住む夢をもちながら、長年にわたり、軒の長い日本古来の民家を探しておられたお二人。やっとの思いで、今の民家に出会えたのは六年前のことでした。茅葺き屋根にトタンをかぶせた一軒家。篠山ではごく自然な佇まいですが、前に川、後ろに低い山があり、田ん



(上) 農具かけ。引っかけ部分にはくぎを使わず、黒竹を差し込んでひと工夫。猛さんのこだわりが細かな部分にも表現されています

(下) 障子の廃材を利用した白壁のアクセント。白と黒が演出する和の空間に心も癒やされます

守る

伝統建築の確かな息吹を感じて

酒井 清 自治会長（下河原町）

城下町の面影を色濃く残す河原町妻入商家群。その一角に酒井さんのご自宅があります。築百十六年の歴史を有した静かな佇まい。酒井さんは、「子どものころ、悪さして柱や壁によくキズを付けたものです。今は黒光りしていますが、当時のままの形で残っています。柱の一本一本に、先代から伝わる深い歴史と確かな息吹を感じます」と話されます。

ところで、篠山伝統的建造物群保存地区内の六自治会による、「篠山まちなみ保存会」（小林三三会長の事務局長も務められている酒井さん。「今後は、地域の住民一人ひとりが、保存地区に選定されたことを共通認識

ぼと畑に包まれて建つ立地条件に、ワーツと胸がときめいたそうです。約二百平方メートルある母屋を支える真つ黒に煤けた太い柱や梁からは、深い歴史とともに、つくり手と住み手の愛情がひしひしと伝わってきます。そんな母屋には、猛さん手づくりの大八車の車輪を使ったシャンデリアや、農具かけ、障子の廃材を使つた白壁のアクセントなどをさりげなく配置。これらは、田舎家での素朴な暮らしに美しくとけ込んでいます。工夫とこだわりで、いらないもの

たもの用途を変えて再利用。猛さんは、「次は、木うすをいすにしようと考えているところですよ」と、にこやかに話されていました。ところで、多恵子さんの田舎家へのこだわりは、山野草と深く結びついています。家の周りや庭に大好きな山野草を育てたいとの強い思いがあり、初めは、荒れ放題だった裏庭の斜面を二年間かけて整備。今では、サクラ、ツバキ、コブシなどのほか、アケビ、ヤマフジなどの自生種を中心に約三百もの花木が美しく咲き乱れ、四季の移ろいを伝えていきます。裏庭のベンチに腰掛けながら、「ここから眺める白髪岳は最高でしょ。これからの谷に、そして、



▲多恵子さんの好きな言葉（多恵子さんの実姉・多賀子さん書）

▲手入れの行き届いた裏庭。5月21日から23日までは、「丹波の森花くらぶ」主催の「たんぽおーブンガーデン」にも参加

周りの風景にあった庭づくりを心がけたいですね」と、満面に笑みを浮かべる多恵子さん。今後も、自作の田舎家に包まれ、マイペースに暮らす木田さんご夫妻の楽しみは、尽きることがなさそうです。

▶縁側で、風情ある中庭を眺めながら、「こつこつとゆったりとした時間を楽しんでますよ」と話される酒井さん



残しておきたい、篠山の風景

残しておきたい篠山の風景。それは、シャープな線で明と暗に切り分けられる切り絵の中で、懐かしい思い出とともに美しく表現されています。

「篠山きりえの会」。二年前に発足し、現在七人のメンバーで活動されています。

ここでは、会員皆さんのお気に入りの作品と合わせ、篠山の原風景に寄せる思いをうかがいましたのでご紹介します。



「春を待つ」

こめたに
米谷 ルリ子さん(三田市)

「篠山の名所旧跡だけでなく、市民皆さんの生活が感じられる場所を『きりえ』で残したいと思っています。建物だけでなく、たとえば一本の木でもいいんです。今の間に、大事にしないと消えてしまうものを描くことが目的です。私のこの作品は、真南条を通りかかったとき、ちょうど茅葺きの準備で茅が干してあり、その状況を描きました。それは、今では少なくなった茅葺き職人さんがそこにおられたことや、昔ながらの生活感と佇まいが残っていることに心を引かれたからなんです」



「御徒町の武家屋敷」



波部 稔さん(井ノ上)

「篠山城跡周辺には、安間家や河原町妻入商家群、御徒町武家屋敷など、数多くの歴史遺産が往時の姿をしのばせています。中でも、武家屋敷の昔ながらの茅葺きや門構えには心が癒やされます。スケッチしながら、実物をゆつくりと見ることは楽しいし、時間がどれほど経っても飽きないものです。古い建物は、残念なことだんだんと姿を消していきます。しかし、私はできるだけ写真や切り絵に残していき、子どもや孫たちにも伝えてやりたいと思っています」



「里の雪」

ゆきこ
西田 悠起子さん(奥県守)

「私は、雪をかぶった稲木を描きました。私が子どものころは、この稲木に麦や稲をかけたたり、登ったりしてよく遊んだものです。夏にはこの稲木に枝が張り、カブトムシやいろんな昆虫が集まってきたのを懐かしく思い出します。今では、稲木の姿はほとんど目にすることはありません。でも、私の孫や今の子どもたちには、自然を守っていくことの大切さはもちろん、木のぬくもりや薬のぬくもりも伝えたい。ふるさとの風景の中で、私が楽しく遊び回っていたように」

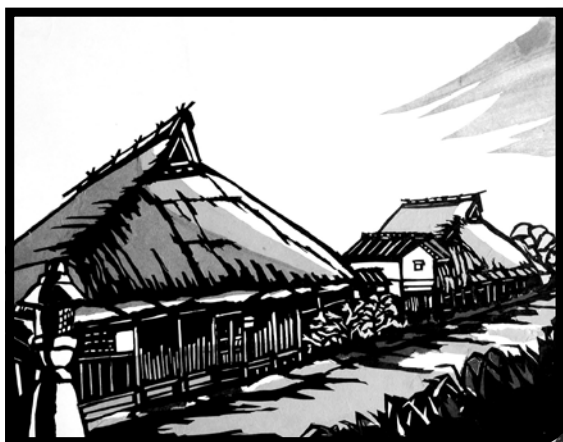


「春を待つ」

古林 美津子さん(杉)



「茅葺きの家があり、目を閉じると小鳥のさえずりが聞こえてくる、そんなのどかな風景を切り絵に残しました。私の実家は、山すそ近くの田舎家。子どものころは、お弁当を持ってよく山に登ったものです。春になればよもぎを摘み、おもちゃ作りしました。そんな懐かしい風景を思い出するとき、年を重ねることにふるさとを恋しく思います。たとえば、昔ながらの建物が消えても、切り絵を通じて、私の心の中で、いつまでも大切な思い出として残し続けたいと思っています」



「八上の民家」

井上 富子さん(中県守)



「八上地区の茅葺きの民家が軒を連ねていた風景を描きました。私の実家は奥畑にあり、珍しい茅葺きの二階建てだったんです。小さな家であっただけに、家族のふれあう機会が多かったことを覚えています。時代は変化し、現在風の家があちこちに建ちました。でも、何かしら、家族の会話が少なくなっているような気がしてなりません。今後、茅葺きの佇まいは、ますます姿を消していくでしょう。でも、人のおつきあいは、これまでと同様に、大切にしていきたいものですよね」



も心の中にしっかりと描き続け、次世代に引き継がれているものもありました。

市民の皆さんにとって、大切にしたい、守りたいと思われているのはどのようなものですか。

この特集が、皆さんに大切な「たからもの」を見つめ直していただける、きっかけになれば幸いです。

(安間家にて撮影)

便利で、手間暇かけずに、ほしいものがすぐに手に入る時代。

しかし、私たちは何か大切な、かけがえのないものを見失ってはいないでしょうか。

今回ご登場いただいた皆さんが、大切にされているもの。それは、今も昔の姿のまま守り伝えられているものや、たとえば、形が消えようと